

# これが私の楽器です!

音楽家にとってなにより大切な楽器を大公開!  
東京交響楽団のみなさんはどんな楽器をお使いなのでしょう?

川崎市フランチャイズ  
オーケストラ  
東京交響楽団の  
音のヒミツ  
第23回



©N. Ikegami

第1ヴァイオリン フォアシュペラー奏者

## 木村 正貴

Masaki Kimura

木材も色も選んだ  
新作ヴァイオリン  
自分のために  
作られた楽器は  
弾くのが楽しい!

私が普段メインに使っている楽器は、ミラノで活躍した製作者ランドルフィが1762年に作ったものです。明るい音が突き抜けるように飛ぶ楽器ですが、250年も前に作られたイタリアの楽器なので、日本だと湿度の多い日は音が出づらく、冬の乾燥の時期は接着剤の膠がはがれてしまうなど、楽器の状態が環境に左右され、かなりストレスでした。また震災以降、地元の熊本で野外演奏することも多くなったので、もうひとつどんな環境でも弾ける楽器を探し始めました。そんな時、クレモナで製作している西村翔太郎さんの楽器の話が妻から聞き、私も機会があり弾いてみたところ、とてもよく鳴ってビックリ。新作楽器に対するイメージが覆されました。その後、西村さんが製作した他の楽器も弾かせてもらい、やはり良い

音だったので、注文しました。ランドルフィは低音が少し弱いので、新しい楽器は低音がしっかり鳴るようにしたいと依頼したところ、「ならば裏板はこの中から選んでください」と木材選びから始まりました。西村さんはまだ30代半ばのとても研究熱心な方で、音響学の理論に基づいて製作されています。木材の選択もそう。表板は、裏板と音響学的な相性があるとのこと、西村さんにお任せしました。そして製作開始。作業が進むたびに写真を送ってもらい、その様子を見ながら約3か月で完成。昨年3月初めに楽器を受け取ったときには「ついに実物が来た!」と感激しました。もうすぐ弾き始めて1年になります。

西村さんの楽器とランドルフィ、それぞれ長所が違うので、弾くのがとても楽しいです。西村さんの楽器は、気候による音の変化はあまりなく、出したい音に素直に反応してくれるので弾きやすい。そしてなにより音が良いのです。また、新作楽器は通常重いのですが、この楽器はとても軽いのも驚きです。演奏会では曲に合う楽器を選んでいますが、思い返すと今年に入ってから東響で弾いているのは新しい楽器ばかりです。

新作楽器は、何か問題が起きたら製作者本人にすぐ相談でき、調整してもらえるのも強みです。「作ったら終わり」ではなく、調整

してまた新たな楽器の一面を見ることができ、本当に楽しい楽器です。東響の音は近年キャラクターが変わってきたと思います。音楽監督ジョナサン・ノットは本番で予想外な指揮をするので、いつもワクワクします。これからもノット監督の求める音やプログラムに合わせて楽器を選ぶので、「今日はどちらの楽器かな」と客席からぜひご覧ください。

お気に入りの、美しい柾目の裏板。木村さんが選んだ板を使用し、音質を重視するため音が調整しやすい2枚板に。製作中、柾目が濃くあらわれたので、楽器の色を予定より少し濃くしました。

スクロールもお気に入り。ヴァイオリン1挺で使用する木材はこれ。「この材料で作ります」と写真が送られてきて製作開始!

まずネックから作っていきます。

「楽器に合う弦」と西村さんの勧めで、エヴァ・ピラッツィのセットとヴィジョン・ソノのセット、2種類を試し中。松脂は通称「缶ベル」、ベルナルデルの100年ほど前のもの。



西村翔太郎さんによるガルネリ・タイプの2019年製。f字孔の形も色も西村さんと相談しながら選びました。取材時の蛍光灯の下では少し茶色がかかった赤に見えますが、自然光や照明の種類によって違う色に見えるそうです。

こちらが1762年製のランドルフィ。さすがイタリアン・オールドという風格です。

オールド・フレンチ弓のラミー。ランドルフィと共に弾いていましたが、新しい楽器とも相性がよいのでそのまま使用。「ラミー・トーンとも言われますが、先まで弾き込める、表現がつけやすい弓です」

ケースの中にはポストカードが。「自分のために製作された楽器」というのが嬉しくて。これまで送られてきた写真で作りました。木村さんはスター・ウォーズ・ファンなので、楽譜ケースにステッカーが。



裏板を製作中。

